

いしかり砂丘の風資料館紀要

第3巻

BULLETIN OF THE ISHIKARI LOCAL MUSEUM

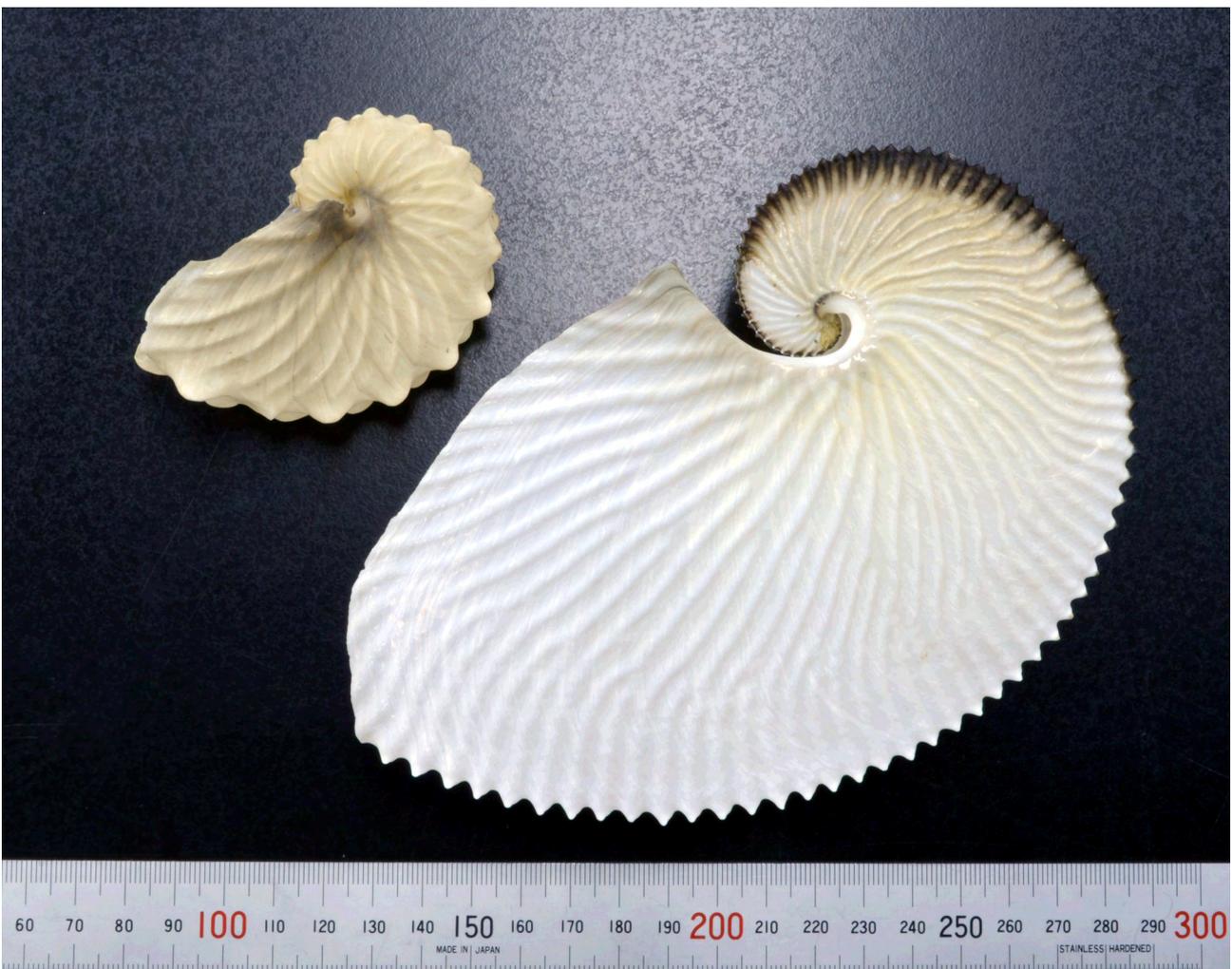
Volume 3

March, 2013



B. タコブネの殻背面.

A. タコブネ *Argonauta hians* の殻. 2012年11月8日, 石狩浜に漂着したもの.



C. タコブネ (左上) とアオイガイ *Argonauta argo* との比較.

口絵 1. 北海道石狩浜で初めて発見されたタコブネの漂着.

口絵1. 北海道石狩浜で初めて発見されたタコブネの漂着 Stranded *Argonauta hians* discovered for the first time on Ishikari Beach, Hokkaido, Japan

2012年10月末から11月にかけて、タコブネ *Argonauta hians* Lightfoot, 1786 の殻の漂着が、石狩湾奥部の石狩浜において初めて発見された。これはタコブネの最北漂着記録と思われる。

タコブネはカイダコ科の浮遊性のタコで、世界中の熱帯～温帯の海洋表層に生息する。メスは産卵・孵化のための殻を作り、自身もその内側に入って生活する。殻は鮭色をした薄い石灰質で、殻長は大きいもので8～9 cmに達する。殻の側面には太い肋が多数あり、周縁部には丸みをもった棘が2列並んでいる。

タコブネと同属で、やはり熱帯～温帯の海に生息するアオイガイ *Argonauta argo* は、本州・九州の日本海側の海岸でしばしば大量漂着があることが知られており、年によっては北海道でも大量に漂着することがある（鈴木，2006；志賀，2007；志賀・伊藤，2011など）。それに対してタコブネは、本州でも大量に漂着することはなく、これまで北海道での発見例は極めて少ない。著者の知る限り、渡島地方～後志地方の日本海側で漂着が3例、日高地方沖での生体の捕獲が1例知られているのみである。今回の石狩浜での漂着は、最北（対馬暖流の最も下流側）の事例となる。

写真の個体は、採集者から、いしかり砂丘の風資料館に寄贈していただいたものである。2012年秋は、これを含めて合わせて5件、石狩湾内での漂着情報が寄せられている。

(志賀健司)

引用文献

志賀健司，2007. 北海道石狩湾岸におけるアオイガイの大量漂着. 漂着物学会誌，5：39-44.

志賀健司・伊藤静孝，2011. 2005年～2009年の石狩湾沿岸におけるアオイガイ漂着. いしかり砂丘の風資料館紀要，1：13-19.

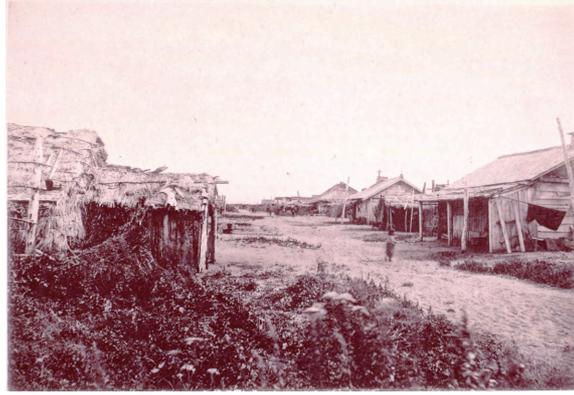
鈴木明彦，2006. 北海道石狩浜へのアオイガイの漂着. ちりぼたん（日本貝類学会研究連絡誌），37：17-20.



A 石狩燈台



B 全アイノ村落



C 全河岸



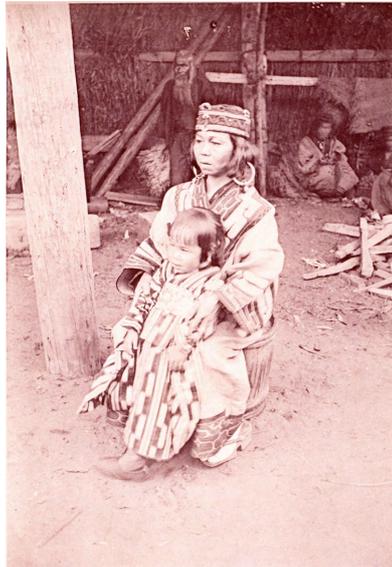
D 全熊小屋



E 土人の後姿



F 全土人の女



G アイノの集合



H 石狩アイノ集合



口絵2. 明治30年に撮影された石狩市関係写真.

口絵2. 明治30年に撮影された石狩市関係写真

Pictures related to Ishikari City taken in 1897



ここに掲載した写真はいずれも明治31年2月と6月に刊行された写真集及び雑誌に掲載された石狩市に関する写真である。A～Gは光村写真部が明治31年6月に刊行した『旅乃家都登蝦夷の巻』のなかに収められているもので、おそらく前年の夏か秋の撮影かと思われる。またHは明治31年2月5日刊行の雑誌『太陽』第4巻第3号の口絵に掲載された写真である。掲載写真には「光村氏写」（光村氏とは光村利藻と思われる）とあり『旅乃家都登蝦夷の巻』のGに掲載されているカットと同一人物が写り、並び方も同じことから『旅乃家都登』を制作する目的で撮影された際の一枚を転載したものとみられる。「石狩アイヌ」と表記されているが、後述するように江別市対雁に移住させられた「樺太アイヌ」の人々を撮影したものである。なお、以下に簡単な解説をつけたが、タイトルは原著による。

これらの一連の写真を知ることとなった端緒は、札幌市在住の山本雅晴氏の調査により、紹介した「石狩燈台」の写真の存在が明らかになったことによるものである。また、画像についてはHを除き北海道開拓記念館の三浦泰之氏のお世話になった。

(石橋孝夫)

A 「石狩燈台」

この写真は明治25年1月1日から稼働した「石狩燈台」の全景写真である。従来、石狩燈台の写真は明治40年に改築以降のものしか知られていなかった。文献上、木造六角形の構造とされていたが、この写真から燈台と付帯施設のより具体的な姿がわかる。背後は石狩川で、B～Hの樺太アイヌ集落のあった来札と、遠く当別の阿蘇岩山が写っている。

B 「全アイヌ村落」

道の両側に家が立並んでいる風景。中央の道は八幡町から厚田村へ向かう「旧厚田街道」とみられる。道の中央に子供、その奥にも不鮮明ながら数人の人影がみえる。向かって右側の家並みは板葺の家が多い。右側には電信柱がみえる。なお、この画像は2002年、北海道開拓記念館第54回特別展「描かれた北海道18・19世紀の絵画が伝えた北のイメージ」で紹介されている。

C 「全河岸」

石狩川右岸の停泊中の三羽船と磯舟。撮影方向は右奥に石狩本町市街とみられる町並みが写っているので、右岸から上流方向（南）に向けて撮影したと考えられる。

D 「全熊小屋」

仔熊飼養用檻。割り木を組み合わせている。

E 「土人の後姿」

民族衣装を着用した二人の女性の後ろ姿を撮影。右側の女性は金帯を着用している。

F 「全土人の女」

女性とその子と思われる女児が写っている。母親と思

われる女性の着物は民族衣装なのに対して、女児は矢がすり様の文様のある和服を着用している。

G 「アイノの集合」

男性2人、女性7人の計9人の集合写真。女性は小さなビーズ付きの帽子のようなかぶり物をし、タマサイ、耳飾りを付けている。男性も含め前列の人は下駄？を着用している。

右から二人目の女性（E、Fにも登場する）だけが白足袋をはいている。

H 「石狩アイノ集合」雑誌『太陽』第4巻第3号掲載

写真タイトルには「石狩アイノ集合」とあるが、目次には「石狩アイノ集會」となっている。この写真は前掲『旅乃家都登蝦夷の巻』の「アイノ集合」とほぼ同じカットであるが、これは左斜め方向から写したものである。登場人物も同じである。背後に女性と子供2人が写り込んでいる。なお、この写真は東京大学資料編纂所「古写真データベース アイヌ」にも収録されている。

出典

光村写真部、1898、旅乃家都登蝦夷の巻（旅の土産第四号）。光村写真部。

東京博文館、1898、石狩アイノ集合。太陽、4(3)。

参考文献

東京大学資料編纂所、古写真データベース アイヌ。
北海道開拓記念館、2002、第54回特別展図録／描かれた北海道 —18・19世紀の絵画が伝えた北のイメージ—。北海道開拓記念館。

いしかり砂丘の風資料館 紀要

第3巻

目次

木戸 奈央子・平河内 毅：石狩市若生C遺跡の出土陶磁器について	…1
工藤 義衛：各区務所往復 明治十二年一月	…11
石橋 孝夫・中村 和之・竹内 孝・越田 賢一郎：石狩市八幡出土の ガラス玉の分析	…23
志賀 健司・石橋 孝夫：石狩湾沿岸で2012年に見られた ギンカクラゲの大量漂着	…37
石川 治：GPSロガーを用いた石狩川河口砂嘴の地形変化の調査	…43
荒山 千恵：ハマニンニク製の容器「テンキ」 —テーマ展「アイヌの工芸テンキ」および関連事業からの報告—	…55
志賀 健司：2012年の石狩海岸林東部の融雪プールの気温と水温の観測記録	…65
斎藤 和範・内藤 華子：いしかり海のふれあい自然教室で見られた 北海道石狩市送毛海岸の磯生物（その1）	…67
口 絵	
北海道石狩浜で初めて発見されたタコブネの漂着	…i
明治30年に撮影された石狩市関係写真	…iii

